

1 ねらいとする道徳的価値

3・4年生の時期の児童は、自然や動植物を大事に守り育てようとする心が生まれ、また、自然を大切にすることで、自分たちの生命も守られることに気付くようになる。それらを踏まえ、自然環境やその中に生きる動植物を守るために自分たちにできることを実行しようとする意欲を高める。〔内容項目：自然愛護〕

2 教材の概要

本教材は、平成28年3月に東京都教育委員会が発行した『特別の教科 道徳』移行措置対応小学校版東京都道徳教育教材集」に掲載されている。生まれ育った町に帰った「ぼく」が、小学校3年生の頃に友達と道端の水路でタガメを見掛けたことを思い出し、今は乾いてしまった水路のゴミを拾いながら人と自然との関わりに思いを巡らせるという内容である。人間は自然を壊すことも守ることもできることに気付き、改めて自然環境を守ることの大切さについて考えることのできる教材である。

また、同じく東京都教育委員会が発行している「東京都道徳教育教材集小学校3・4年生版心しなやかに」に掲載されている「東京のアルバム『都レンジャー』」では、東京都の豊かな自然について記すとともに、その自然を守るために活躍している「都レンジャー」の活動を紹介している。授業の終末で自然を守る具体的な取組について考えるために活用できる教材である。

3 環境教育で育成する主な資質・能力（ESDの視点）

【ケ 自ら進んで環境の保護・保全に参画しようとする態度（進んで参加する態度）】

自然のもつ美しさやすばらしさを感じ得できるようにするとともに、身近なところから少しずつ自分たちなりにできることを考え、実行しようとする態度を育てる。

4 環境教育で対象とする主な内容（ESDの構成概念）

【B 自然や生命の尊重（公平性）】

自然やその中に生きる動植物を大切にすることで、自分たちの生命も守られることに気付き、環境保全についても関心を持ち、その必要性について考え、自然や動植物を大切にしようとする視点を扱う。

5 主なSDGsとの関連



（目標8）経済成長と環境悪化の分断を円にする必要がある。そのため、本単元の指導に当たっては、（目標12）持続可能な生産消費形態を確保しながら、

（目標11）持続可能な都市化を促進し、人間移住計画・管理の能力を強化することも視野に入れる。また、（目標6）山地、森林、湿地、河川、帯水層、沼地などの水に関連する生態系の保護・回復を行うとともに、（目標15）自然生息地の劣化を抑制することは、生物多様性の損失を阻止することにもつながっていく。

6 本時の展開例（1/1時間）

○主な学習活動 ・ 予想される児童の反応	□主な支援 ◆主な評価 〈環境教育で育成する主な資質・能力〉
<p>「タガメという昆虫を知っていますか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知らない。 ・図鑑で見たことはある。 ・池や沼、水田などに住んでいる。 ・日本でもっとも大きい水の中で生活する昆虫 <p>○「タガメの記おく」を読む。</p> <p>「タガメを捕まえようとした『ぼく』に、徹はどのような思いで注意したのでしょうか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タガメは弱い生き物だから、守りたい。 <p>「黙ってタガメを見つめながら、三人は、どのようなことを考えていたのでしょうか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タガメは、水の中でちゃんと生きている。 ・タガメは、水草にしっかりつかまっている。 ・タガメの動きが、面白い。 ・本当に水がきれいだ。水が濁らないといい。 ・このまま、ずっと静かにしておこう。 <p>（話し合い）</p> <p>「ぼくは、どのような思いから、水路に落ちていたお菓子の袋とペットボトルをそっと拾い上げたのでしょうか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タガメが住めるように戻したいと思ったから。 <p>（中心となる発問）</p> <p>「『君たちはこれからどうしていくんだい。』というタガメの問いかけに、あなたはどうか答えますか。返事を書きましょう。」</p> <p>○自分が今まで自然に対してどのように感じ、接してきたかを振り返りながら、返事を書く。</p> <p>○自然保護について考えながら、返事を書く。</p> <p>○数名の児童が発表し、学級内で共有する。</p> <p>○説話を聞く。</p>	<p>□教材の内容に興味や関心をもたせる。</p> <p>□タガメの写真や「小学校版東京都道徳教育教材集」に掲載の挿絵を提示する。</p> <p>□範読する。</p> <p>□「ぼく」がケガをしないように気を遣っていることが主とならないよう、「タガメは大切な生き物なんだ」の部分を中心に捉えさせるようにする。</p> <p>□三人ともタガメを初めて見たことや、徹の言葉に「ぼく」と恵がどのようなことを考えたか、「タガメは、不思議でいっぱいだった」とはどういうことか、といった点に着目させながら捉えさせるようにする。</p> <p>□「ぼく」、徹、恵それぞれについて考えさせる必要はない。</p> <p>□行為に着目させるのではなく、「思い」を捉えさせる。</p> <p>□「君たちがしてきたこと」が何なのかということにも着目させながら、自然との向き合い方について自分のこととして深く考えさせる。</p> <p>◆タガメへの返事を書く活動を通じて、自分自身と自然との関わりについて見つめ直し、これからどのように自然と向き合っていくべきかについて深く考え、実行していこうとしている。</p> <p>（ケ 自ら進んで環境の保護・保全に参画しようとする態度）</p> <p>□自分が自然のすばらしさや不思議さを実感したり、自然の偉大さを感じたりした経験を紹介するなどしながら、自然を大切にすることについて、教師が説話をする。</p> <p>□「都レンジャー」の活躍を紹介してもよい。</p>

タガメの記おく

小 3-4 D ・自然愛護

ぼくは、東京で働くようになってから、毎年、五月の連休は自分が生まれ育った町に帰って、実家で過ごすようにしている。

今日はしばらくぶりに、自分が通っていた小学校に行ってみることにした。実家からは歩いて十五分ほどだ。

(だいぶ景色が変わったな。)

ぼくが小学生のころは、川ぞいの道の両側には畑や水田が広がっていた。でも、今はたくさん建物が並び畑や水田はわずかしかない。駅に近くて便利だから、家がとてもふえたのだ。新しくできたコンビニエンスストアのわきの路地では、あたたかい日差しを浴びて、子どもたちが楽しそうになわとびをして遊んでいた。

川ぞいの道から右に外れて坂道を登っていくと小学校だ。

坂道の左側には、はばが三十センチメートルくらいの水路がある。水路をのぞくとすっきりかわいていて、だれかがすてたのか、おかしなふくろとペットボトルが落ちていた。

(そうだ。この水路だった。……)

ぼくの頭の中は、小学校三年生の五月のあの日にもどっていった。

学校から帰る時はいつも徹と恵がいっしょだった。三人でこの坂道を歩いていると、徹がとつ然びっくりしたような声を出した。

「タガメだ。」

「え、タガメ。」

ぼくと恵は、水路をのぞきこんだ。すると、かまのような形の大きな前足を広げた、五センチメートル以上もあるタガメが、ゆっくりとした流れの中で水草につかまっていた。

すると、徹が、こうふんをおさえるように小声で言った。

「タガメは、大きなこの手で魚やカエルをつかまえるんだ。明るい時はかくれていて、夜になると動くから見つけにくいってお父さんが言っていた。本物を見たのは初めてだよ。」

タガメの記おく

ぼくは手をのばして、タガメをつかまえようとした。

すると、徹が、
「やめろよ。タガメは大切な生き物なんだ。それに、さされると大変なことになるよ。はりみたいな口を相手の体に入れて、とかして食べちゃうんだ。」

と、小声のまま、しかし、強い口調で、ぼくに注意した。ぼくは思わず手をひっこめた。

「ちょっとこわい感じね。」

と恵が言うと、徹は、
「タガメは強そうに見えるけど、とっても弱い生き物なんだ。水がよこれると生きていけないんだよ。」

と、つぶやくように言った。

ぼくたち三人は、まるで時間が止まったように、だまってタガメを見つめていた。タガメは、不思議でいっばいだった。

どのくらい時間がたっただろう。恵が、

「そろそろ帰ろう。」

と言うまで、動くことをわすれていた。

その日から、この道を通るたびに水路を見たが、タガメには一度も出会えなかった。

ぼくは、かわいた水路をながめながら考え始めた。

(日本にタガメがいなくなることが心配されていると聞いたことがある。金魚を食べるから、悪いやつだと、人間が勝手に決めつけていた時もあったようだ。タガメがすめるような所をへらし、水をよこしてタガメが生きていけなくなるようにしたのはわたしたち人間だ。……)

あの時、ぼくたちの目の前にあらわれたタガメは、そのことを伝えたかったのではないだろうか。タガメは、ぼくたちに語りかける。

「ぼくは、君たちがしてきたことをよく知っている。君たちはこれからどうしていくんだい。」

ぼくは、水路に落ちていたおかしなふくろとペットボトルを、そっと拾い上げた。



タガメの記おく

タガメの記おく